2017年　ボウリングマガジン11月号に掲載されました。

弊社主催：PBAリージョナル
DHCカップ「チーターダブルス」
JPBAが本格的に参戦！

大会概要・結果の詳細は
弊社HPをご覧ください。

PBAリージョナルツアーインジャパン2017－2018
DHCカップPBAミックスダブルス・チーターオープン
●9月2～3日　愛知・名古屋グランドボウル

JPBAも参戦 松永・吉田ペアがスカッチを制す

DHCカップPBA初のミックスダブルスが行われた。今大会からJPBAの選手も出場できることになり、104チーム208名がエントリー。ナショナルチームメンバーを含め、国内のトップボウラーが頂点を目指した。

資料提供／（株）ジャパンボウリングプロモーション

▲賞金の2連覇を果たした向谷実咲。ミックスダブルスでは決勝1回戦で松永・吉田ペアに敗れたが、終始安定していた

RESULTS

チーターミックスダブルス・オープン
優勝 松永裕美 吉田大祐ペア
チーターマスターズ
優勝 村濱裕紀
チータークイーンズ
優勝 向谷実咲

16名による個人戦に進出は、3Gを投げ、11Gトータル上位3名が決勝進出。クイーンズでは、予選後半に9連発で会場を沸かせた水谷若菜（JPBA）が、ディフェンディングチャンピオンの向谷や、24Gを打った向谷の妹・優那（JBC）らの追い上げをかわしてトップを死守。2位に向谷、3位には西澤琴子（JPBA）が滑り込んだ。

マスターズは1G目で206の石川裕大（JBC）がトップに躍り出た一方で、堤が158と失速。徐々に追い上げる藤井信人（JPBA）、早坂友伸、村濱裕紀（ともにJBC）、トニー・アンダーソンが3枠を争い、早坂、村濱、藤井の順で決勝ステップラダーに進むことになった。

ミックスダブルスは予選上位36チームがスカッチで4Gを投げ、予選スコアとの20Gトータルで16チームが選出され、4プロックに分かれて1Gマッチを展開した。

クイーンズ3位決定戦、向谷はプロ2年目の西澤が5フレまで3オープンという不調もあって185－145と快勝し、元ユースナショナルメンバーで今年プロに転向した水谷が誇る優勝決定戦に進出した。

ここでも向谷は相手のミスで流れをつかむ。水谷が1フレで7本カウント。3、4フレもオープンとするなか、向谷は4、5フレをダブル。その後もノーミスでまとめ、217－148で圧勝した。

マスターズは藤井との1戦を楽しみにしていた村濱がスペアスタート。藤井が3フレをスプリット、6フレもオープンとする展開にスペアでつないで、9フレからのターキーで勝負を決めた。

これで勢いに乗った村濱は優勝決定戦でも1フレから5連発。早坂も4フレの⑤－⑩をカバーするなど粘ったが、5フレでオープン。大きく差が広がった。231－199で初優勝の村濱は「うれしいです。初めての参加だったので緊張しましたが、ゲーム数を重ねていくうちに慣れてきて、自分のボウリングができました」と振り返った。

ミックスダブルスは、松永・吉田ペアと水谷・白濱ペアで優勝を争った。パートナーがサウスポーの吉田ということもあって、大会前にスカッチの練習に取り組んだという松永。その成果が準決勝の最終ゲーム265に表れると、決勝1回戦でも235の滑り出し。吉田もリージョナルツアーで2勝を挙げているだけに落ち着いており、フォーススタートを切った。水谷・白濱もスペアスタートの後、ターキーを決めるが6、8フレをオープン。7フレからターキーの松永・吉田ペアが一気に優勝への波に乗った。

ミックスダブルスは、各自が8Gを投げ、チーム16Gのスコア上位36チームが準決勝ラウンドへ。また男子・女子の個人上位16名は、それぞれマスターズとクイーンズの準決勝へと駒を進めた。

ハイスコアが期待されるチーターだが、リニューアルされた今年のパターンにはノーヘッドで苦しんだという声も多かった。そのなかでJBCの吉野真宣（個人2位）と向谷実咲（個人3位）ペアが安定した投球を見せ、前半トップ。しかし、後半で堤拓樹・入江菜々美（JBC）ペアが踏ん張り、1位を奪った。

▲ミックスダブルス優勝は「決勝戦はとても緊張しましたが、楽しくボウリングさせてもらいました」と言う松永裕美（右）と「チームジャパンでも金メダル」と決意を新たにした吉田大祐ペア